

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）
留学結果報告書

令和 7 年 3 月 24 日

山梨県知事 殿

本人氏名 岡本想

次のとおり留学の成果を報告します。

留 学 先 国 名	タイ王国
学 校 等 名	Bangkok Y.M.C.A. Foundation, Phayao Center
留 学 期 間	令和 6 年 3 月 3 日 ～ 令和 7 年 2 月 26 日

1. はじめに

私は令和6年度3月からの1年間を通し、Bangkok Y.M.C.A. Foundationが運営する児童保護シェルター パヤオセンターにて日本人ボランティアスタッフとしてセンターに入所する山岳少数民族の子どもたちの支援活動に従事した。

本レポートでは、パヤオセンターで行った活動の内容やそれを通し学び得たことを報告する。

2. Bangkok Y.M.C.A. Foundation “Protect a child” プロジェクトの概要

1980年代から1990年代にかけて、タイでは子どもの人身売買や性的搾取が深刻な社会問題となっていた。特にタイ北部の農村地域では、都市の経済成長による格差の拡大から貧困のために教育が受けられなかったり、性産業へ身売りされる子どもたちが少なくなかった。また、タイ北部にはミャンマーやラオス、中国雲南をルーツとする山岳少数民族も多く暮らしている。80年代当時、タイ国籍もなく IDカードも所持していない山岳少数民族の数は今よりさらに多く、彼らはその社会的な立場の弱さにつけ込まれ人身売買のターゲットとなりやすかった。

こうした社会的背景の中、バンコク YMCA 財団は深刻な人身取引・児童買春の問題解決のために、1993年に人身取引のリスクの高い子どもたちの保護施設としてパヤオセンターを立ち上げた。1994年には横浜 YMCA と協働し、児童保護プロジェクト「Protect a Child」としてパヤオセンターを拠点にタイ北部山岳少数民族の子どもたちの人身取引防止と教育支援活動を行っている。



←山岳少数民族の村
道路が舗装されておらず、
雨が降ると陸の孤島となっ
てしまう。



←家での炊事の様子

3. 本留学のテーマ・目的とその振り返り

出国前、「タイ北部農村地域における社会課題の調査とソーシャルワーク研修」を本留学のテーマとして設定した。また目的として、タイ北部における社会課題の把握とそれらの課題を解決するためのコミュニティソーシャルワークを学ぶことを掲げた。1年間のセンターでの生活を終え振り返り正直に所感を述べると、この目的の完全な達成はできなかった。一方で、留学前には予期していなかったような学びもたくさん得ることができた。次項以降で、具体的な活動と成果について述べる。

4. 本留学で実際に行った活動とそのリフレクション

本留学で私が従事した主な業務は以下の通りである。各項目ごとに簡潔にリフレクションを行う。

① 音楽クラス

週に1度音楽教室を開催し、ギター、ウクレレ、ドラムの演奏指導を行った。音楽を通した自己表現や、子どもたちとのコミュニケーションの手段として私にとってもよい時間となった。

② 語学クラス

週に一度日本語交流の時間を設け、子どもたちに簡単な日本語指導を行った。はじめセンター側からの要望で、高学年には文法や文字の読み書きを含めたより高いレベルの指導を行ったが、日本語教育の経験がない私にとってはこの役割を果たす力が不足していた。そのため、日本語教室から日本語交流クラスに形態を変え簡単な挨拶や日常的に使う簡単な文章を暗唱するにとどまった。

この教室で覚えた日本語は、日本からのスタディツアーの学生とセンターの子どもたちの交流の助けとなった。

③ 農作業

パヤオセンターでは有機農業や養鶏、魚の養殖にも取り組んでいる。畑で採れた野菜や卵は自家消費にとどまらず、地元の市場での販売もおこないセンター運営資金の大切な財源の一つとなっている。毎日子どもたちと畑に水をやり、鶏の卵を集め、野菜の収穫を行っていた。



④ 子どもたちの日常生活のサポート

掃除、洗濯、炊事といった家事はすべて子どもたち自身で行っている。彼女らとともにこれらの生活の作業を行い関係構築に努めた。子どもたちのサポートと記述したが、実際には子どもたちに助けられることばかりであった。少しでも貢献できたのは子どもたちの宿題の手伝いであろうか。特に中学生の英語の宿題サポートは好評で、「そうくん、ここ教えて!」と頼ってくれるのは嬉しかった。

また、子どもたちとの編み物教室も好評であった。以前から趣味でしていた編み物を子どもたちに教えてみたところセンターで大流行し、編み方を覚えた子どもたちが先生となり低学年の子どもたちも簡単な作品を作ることができるようになった。

⑤ 日本からのスタディツアーのサポート

パヤオセンターには年に5度ほど日本からのスタディツアーの受け入れを行っている。センター唯一の日本人スタッフである私は、ツアー参加者の学生とセンターの子どもたちとのコミュニケーションのサポートや通訳の補佐業務に従事した。

⑥ 少数民族コミュニティへの調査の同行

バンコク YMCA が支援している山岳少数民族の村への調査の同行では、当時私のタイ語の能力が低かったのに加え民族独自の言葉でのやり取りが多く聞き取ることが殆どできなかった。しかし、子どもたちの出身の村を実際にこの目で観察し、生活の様子を肌で感じることはできた。また、タイ国における山岳少数民族に対する抑圧についても学ぶ事ができた。

5. 活動や生活を通して得た学び

私がタイで得た最大の学びは、行動と実務の重要性である。私はもともと山梨県立大学国際政策学部にて、人権が普遍的であると言えるその根拠について考えてきた。「それぞれ異なった存在である人々がどのようにして同じ世界で幸せに生きるか」というのが私の学びのテーマである。「差異を包括した社会をいかに実現するか」とも言いかえられる。個人や人々の権利が守られない状況について、それが不当であり不正義である理由を説明できるようになりたい、また逆にどのような行為が正義といえるのか知りたい、という思いから福祉の理念や人権思想にその根拠を求め学んできた。

しかし私がセンターでの生活を送り業務をこなしていく中で、そんな事を考えている余裕はなかった。少し乱暴かつ語弊のある言い方だったかもしれないが、本当にそう思った。深夜のチェンマイの繁華街で花を売る10歳にも満たない少女を眼の前にした時、薬物に蝕まれた家庭で振るわれる暴力から逃れてセンターに入所した子どもの笑顔を初めて見た時、バンコク YMCA やそこで働くスタッフたちの福祉行為の正しさの根拠を求めようという考えにはならなかった。それよりもその時の自分にとって大きな衝撃だったのは、パヤオの村にセンターを作りスタッフのみなさんが行動を続けた結果子どもの笑顔が見れたという至極単純な因果だった。もちろん、なにかしようと思ったときにその行為の正しさの根拠を求め注意深く行動し、それを省みるのは重要なことである。自分が正しいと思っていたことが実は他人を傷つけてしまうということはよくあることだからだ。しかしながら正しさの根拠に囚われ行動できないのもまた問題である。30年前、今の総主事がパヤオでセンターを立ち上げなければ当然あの笑顔はみることができなかった。

この1年間、センターでの生活を送るだけでも正直精一杯だった。一介の学生がで

きることなど何も無いに等しく、センターに求められる仕事とそれをうまくこなせないギャップに苦しい思いもした。理念や倫理について考える余裕もなく、日々の業務と生活をひたすらにこなしていた。帰国し残りの大学での 1 年間はタイでの生活やスタッフの言葉を思い起こし、その理念や倫理について考えていきたい。センターのなかで生活している渦中では考えられなかった抽象的な事柄も、いまなら深く思考することができる。山梨 YMCA での活動も続け、思考と行動を両立しながら残りの学生生活 1 年間を過ごしていきたい。

以上